

7月に76歳で生涯を閉じた山本寛齋さんは、ファッションデザイナーという枠を超え、圧倒的な存在感で世界を照らした人でした。

## Style アイコン

デビュー当時は日本で理解されなかったものの、1971年に日本人として初めてロンドンでショーをして、世界に衝撃を与えました。

けばけばしい色遣いや過剰なデザイン、有り余る多様性。縄文時代から日本人の奥深く眠る「婆娑羅」な趣味は、どちらかというところ反権威的で、日本らしさとして海外から高く評価され

## 「奇」「異」体現 日本人を鼓舞

た禅や「わびさび」といった上品な美意識の対極にあるものでした。

ただ、この感性が、かねて歌

舞伎にひかれていたデビッド・ボウイの目に留まり、ステージ衣装を手がけることにつながります。「出火吐暴威(デビッド



2018年撮影

・ボウイ)と勢いよく書かれた、ヤンキー趣味全開のマントなど、2人の「かぶいた」アーティストの感性が化学反応を起こし、ポップアートにまで昇華した傑作衣装が生まれました。

80年代に一度経営破綻するなごビジネスでは苦戦しましたが、その後、歌、踊り、ファッションを融合した大型ライブイベントのプロデューサーとして活躍。常に「ここに寛齋がいる」と主張するような絢爛たる服をまとい、いたずらっ子のような笑顔とまっすぐな情熱で周囲を巻き込み、企業から多額の資金を調達してイベントを成功させてきました。

10年前に聞いた講演で、今も

忘れない言葉があります。

「日本人は素晴らしい資質を持っているのに、『奇』と『異』を嫌い、グループの中で安心するるのが問題」

「本当に腹が減ったら、外へ出ていって勝負するしかない。今の日本人は安心できる集団の中で認められればいいと思ってるのではないか」

自ら「奇」で「異」な存在となり、日本の内なる「婆娑羅」を目覚めさせ、命の限り新しい挑戦を続けた寛齋さん。人としてのあり方そのものが創造の源となり、周囲を動かす原動力になることを、存在そのもので示してくれました。

(エッセイスト 中野香織)